

にしられず、忠義にあらざれば是を奮はじと覺悟すべし。  
一、鳥銃の功用

鳥銃は近世の兵器、月々年々に名人競出で、次第に古流は用に不足なり。此器出て長短の兵、弓弩ともに皆廢するに似たり。就中連城銃・大銃に巧妙の人あらば、誠に萬人に敵すとも云べし。東照宮鐵炮の師範井上外記重繼は、よく萬斤の大銃を二人にて是を放つ。其巧機捷輕大敵を挫くの功あり。彈山文集其 神祖慶長十六年八月十三日淺間の山に登り、的を二町外にかけて手自大銃を射給ふ事、三度にして三度中る。則井上氏に命ありて此藝を精練せしむ。且多く大銃を作らしめ給ふ。近世の巧手は、其時分に十倍して奇巧を施す事勝て謂がたし。寛永年中肥前國耶蘇一揆の時、大銃を用ふといへども、其術未精の故、九州の諸侯連城銃を運して城を抜かむとすれども、巧手なくして其的を失ひ城にあたらす。阿蘭陀人を召て打しむるに、日本人より却て拙手にて、皆後の海へ鉛丸を打やりぬ。さしもの蕃和の炮者家流、みな手空しうせり。若當世の名人あらば、賊營よも一日を保んや。城中銃の巧手大勢有之故、大軍を

拒ぐ事數月にして年を越えたり。松平豆州の其功を知るに  
より、一世の内家臣に鐵炮を習練せしめらるゝ事最なり。  
萬治年中肥前州唐津邊において、人を討て立退く武士あり。三十目玉の鐵炮に玉藥を納て擔之、民屋にかけ入、追手來らば其銃を以て可打と氣勢を上げます。敢て入者なし。一兩日を経て捕手、嚮導を先に立て都て八人、一騎歩の細道を連り行。彼者鐵炮を窓の柱にくゝり付て、前後の規星を直して發しけるに、分釐の矢つばをはづさず八人の眞中を打徹しけり。三十目玉さへ如此。已上の大功をおもふべし。陣營城壘を焚落し、堅陣を挫き大艦を覆すも亦此術に火筒の優るものなし。或は唐船の進退するを、帆を燒て孤舟となすの事、様々無窮の妙術あり。異國の舟は櫓を不用、帆のみを以て進退するにより。中華の書に地雷・天燈炮・佛狼機等の名狀あり。兪炮の類なり。愚當世を以ておもふに、本朝に名人ある事、南蠻と云ども其精妙に不可恥。只恨むらくは其功をしる人の少き事を。  
一、炮の用は弓に勝る  
或大名猪狩の場にて大なる猿の、其長七尺計なるが出て、列卒を引裂き噬殺し、白刃を奪取て高樹に上りぬ。其主怒

て強弓に命じて射之しむ。射人山鳥の羽を以て作たる節陰の矢に、わたり四寸の雁股の上刺を番ひて射之に、猿片手にて中に其矢を取て折之。射手安からぬ事におもひ、大雁股にて矢ざし鈍くしてこそは、一の矢は射損じたらめ、二の矢を以て射落さむものと、中刺を番ひて又射之。猿二の矢をも亦取て始のごとく折之。射人赤面して退く。太守則鐵炮の上手に命ず。炮人樹下へ寄るを見て、猿難活事を悟りて合掌して罪を謝す。炮人眉間を的にして放之。猿則樹下へ落たり。衆立寄り見けるに、首半分は碎て微塵になれり。其炮は十五匁玉也。

一、鎗術は武士の表藝

鎗術は近世の武士、表藝として習之事いにしへの弓の如し。其盛に用る事は楠正成以來なり。むかしは大名の弓をさして調度と云、今世は鎗を以て必戰の雄雄を決す。一番弓とは不稱して一番鎗と云。爰を以て専ら鎗の妙手・達人名を近世に奮へり。漢土往昔より用る器にして、其鍛鍊は本朝の如くならず。刀劍の術は勝負の時に臨で、巧拙黑白の如くわかれねども、鎗は其巧拙鮮明に分るゝものなり。

尤鍛鍊なくしては不叶藝なり。場によりて一人守之刻、能く五六人にも相當るものは鎗なり。直鎗・十文字・管鎗・鎌鎗・片鎗・大身等の差別ありて流派多し。其中直鎗は最上のものにして、容易に上手に至り難し。其餘の耳のあるものは、皆直鎗の鋭なるを怖て後人の作れるものなり。其内十文字に尤捷身多くして、はやく其術に驗あり。大勇の力士に大双の十文字を得しめたらば、恐らくは是に敵するものなかるべし。然といへども、兵器は其人により各好む所あるものなれば、優劣は人にありて兵器に有べからず。勝負の道は、其藝の精妙鍛鍊も不可及所あれば、況や兵器をや。天正の前後諸邦の戰場にて、よく武勇を顯したる人の鎗を見るに、皆大身の長さ一尺二寸より二尺餘に至る。其柄うち柄にして周り六寸計、惣長一丈餘なり。皆用て打倒し難伏などして、獨り衝く事のみ必とせざりしと見えたり。御ざれば鎗にあらずと、武田流にいふ事あり。本多忠勝の蜻蛉切のごとき、又は黒田長政の臣林掃部、朝鮮にて虎を突留たりし大身鎗の類是なり。かゝる千萬人にも優りたる事は、其妙手・拙手の境にあらず。本性の大勇力の致す處なれば、藝術のよく及處